

大きな足跡を残した歴史家を思い浮かべてみると、はじめから歴史研究を志していた人ばかりではない。「近代歴史学の父」と呼ばれるレーオポルト・フォン・ランケ（一七九五—一八九六）もそうである。

一八一四年の五月にライプツィヒ大学に入学した彼は、受講の手引きに記されていた勧めにしたがって、ヴィーラント教授の歴史の講義に出席した。先生は熱心に語り、「学生が筆記しようと思っていた紙が湿ってしまうほど口から泡を飛ばした。その被害者が静かに筆記できるように赤い雨傘を頭上に掲げることもあったが、彼は快くそれを許した」（『ランケ自伝』岩波文庫）。微笑ましい情景である。

しかしその内容は煩瑣で、世界史の発展のなかで話の筋道が分からなくなってしまう。歴史の理解を深めさせるものではなかったのである。こうしてその講義は、ランケに何の影響も与えず、むしろ歴史を敬遠させることになった。彼の学生時代の主たる専門は古典文献学となる。では、ランケが歴史家となる決意を固めたのはいつだったのだろうか。それは、彼がライプツィヒでの学業を終え、一八一八年の秋にフランクフルト・アン・デア・オーダーのギムナジウムの教員になってからである。

翌年九月に始まった「古代文学史」と題する授業の準備のために、古代ギリシア、ローマの歴史書を徹底的に読んだことがそのきっかけとなった。歴史の古典自体に触れることよって、歴史の豊かき、歴史家たちの批判的な精神に魅了されたのである。

原典に接し、本物に触れる。このことがもつ力を感じる。音楽の場合もきつとそうであろう。優れた演奏に接する。楽譜を読みぬく。満開の桜とともに、今年も新しい年度を迎えた。元気で、音楽の研鑽に磨きをかけてほしい。

## Parlandoのあゆみ

ばるらんど

その14

## ぱるらんどのあゆみのあゆみ

『ぱるらんど』の前身は、1971年から発行した新規購入資料案内の『収書案内』です。1976年11月発行の46号からは館員や先生方の執筆する読み物を加えて『ぱるらんど』という名前になり、1988年10月発行の150号以降は『収書案内』から独立、利用者の皆さんと図書館とを結ぶコミュニケーション雑誌として発行してきました。

このコーナーでは150号以降に掲載されたシリーズ記事を、それぞれの記事タイトルと内容をリストにしてご紹介してきました。これまでに掲載した号は以下の通りです。

## 1 Parlando Interview (250)

150号以来継続してきた、先生方にお話をうかがってまとめたインタビュー記事です。この「ぱるらんどのあゆみ」第1回として、過去のインタビュー記事をリストにし、先生方のお名前を一覧できるようにしました。

## 2 ピーブル・ビーぶる (251)

ある人物(群)に焦点をあて、関連する資料とともに紹介するシリーズです。このときまでに26回掲載されています。

## 3～4 資料の館 (上) (252) / (下) (253)

さまざまなテーマを設定して当館の所蔵資料からリストアップしたシリーズです。多くの回が、見開き2ページにわたる詳しい資料のリストです。

## 5 ガクフ がくふ 楽譜……いろいろ (255)

当館所蔵の楽譜に焦点を当てたシリーズです。135号(1986年9月発行)から174号(1992年1月発行)にかけて21回掲載され、以後「楽譜ランド」に引き継がれました。

## 6 楽譜ランド (256)

「ガクフ がくふ 楽譜 いろいろ」に引き続き、当館所蔵の楽譜に焦点を当てたシリーズです。176号(1992年5月発行)に第1回を掲載しました。

## 7～9 In my Library こんなの見つけた ① (257) / ② (258) / ③ (259)

当館所蔵の図書やCD、映像資料を紹介するシリーズです。授業やレッスンのために探すのとは少し違った視点からの記事で、このときまでに36回掲載されています。

## 10～13 図書館員のノートから 参考図書のご紹介

① (261) / ② (262) / ③ (263) / ④ (264)

参考図書を紹介するシリーズで、1冊の本を紹介する記事のほかに、あるテーマについての資料をまとめた記事もあります。このときまでに57回掲載、43回まではシリーズ名の「ノート」は「のおと」となっていました。

\* かつこ内は掲載された号数です。

\* それぞれの記事には、現在の所蔵状況とは合致しない内容が一部含まれています。

\* 記事掲載時と現在の請求記号が違っている資料についての紹介が一部含まれています。記事を参照して資料請求する際は、再度OPACで確認してください。

\* 記事を読みたい場合は、『ぱるらんど』の請求記号P1154と希望の号数で請求してください。